
殺し屋本舗 久住 京香

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋本舗 久住 京香

【Zコード】

N8196A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

パソコン／携帯の前の貴方。殺意を持った事がありますか？これは、そんな人達の思いを受けとめ、代わりに殺しをする殺し屋の話です。

密室殺人

私は久住 京香、19歳。
自分で言つのもなんだけど、久住 小春に似ていて可愛い、らしい。
その為、男共が私にまとわりつく。
因みに、私は警視庁の交通課で働いています。
でも、本業は殺し屋だ。
さて、今日の依頼人は……と。
ガチャ。

事務所の扉が開き、髪の長い女性が入つて來た。
「こちらで良いんですね？」

と、恐る恐る聞く女性。

「はい。殺し屋本舗はこちらですよ。」

と、私は答える。

「あの、主人を殺して下さい！」
と、女性。

「その前にお名前を。」

私は女性の名前を求めた。

女性は、名刺を出した。

間宮 加奈子。webデザイナー。

名刺にはそう書いてあつた。

「間宮さん。ご主人を殺して欲しいとの事ですが、どんなご理由で
依頼を？」

間宮は、

「暴力。」

と、答える。

「暴力が嫌なら、離婚すれば良いのでは？」

私はそう言つたが。

「私も最初はそうしようとしたんですが、主人は反対して……。

私、もう耐えられません。」「分かりました。

承りましょう。

報酬は、500万でどうかしら?」「

間富は、

「500万!?」

と、驚き、

「もう少し安くなりませんか?」

と、付け足した。

「間富さん。ご主人は保険に入っていますか?」「

一応、入つてますけど・・・。」

「ならばそれで払つて頂けますか?」

「でも・・・。」

「嫌なら良いんですよ?」

「解りました。500万払います。」

間富は、そう言った。

「では住所を。」

と、間富は自宅の住所を紙に書いて渡した。

「出来ればご主人の写真も頂きたいのですが。私が言うと、間富は鞄から写真を取り出した。かなりのイケメンだった。

「後悔しませんね?」

「はい。」

「では、今夜決行します。」

「ありがとうございます!」

間富は、お辞儀をすると、事務所を出ていった。

「よし!」

私は、事務所を出ると、鍵を掛け、階段を降り、事務所の隣にある一軒の家を訪ねた。

「京香ちゃんか。今日はどんな用?」「

と、口ワモテのオッサンが聞く。

彼は矢車 孝夫。

情報屋だ。

「情報屋。コイツを調べてくれ。」

私は、例の写真を渡した。

「コイツは！？」

と、驚く情報屋。

「知ってるのか？」

私は聞く。

「間宮 篤。この男、この辺りじゃ、有名な敏腕刑事だよ。」

「警察？」

「どこの所轄？」

「警視庁。捜査一課にいるよ。」

「情報屋、それは確かか？」

「行つてみれば解るよ。」

私は情報屋に言われた通りに警視庁へ行つた。
捜査一課は、四階だったな。

私は四階に上り、捜査一課に足を運んだ。

「すいません。こちらに間宮 篤さんがいると聞いたんですけど。」

私がそう言つと、

「僕が間宮だけど、何か用？」

と、例の男が私の前にやつて來た。

「間宮さん。今夜、空いてます？」

「空いてるけど？何で？」

「ちょっと話したい事があつて・・・。」

と、私は顔を赤くして言つた。

「解つた。じゃあ今夜、7：00に噴水公園で待つてるよ。」

間宮はそつと、席に着いた。

間宮 篤・・・。

どうやら女癖もあるらしいな。

私は一旦事務所に戻り、準備を整えた。
そして……。

「間宮さん。待ちました?」

私は噴水公園の前で待ち合わせをしている間宮に声を掛けた。

「京香ちゃん、僕も今来た所だよ。」

と、間宮。

「そう。それじゃあ行きましょうか。

私は、良いところ知ってるんですよ。」

私は、間宮を連れて近くのBARに向かつた。

「ここのお酒、とても美味しいんですよ。」

「へえ。」

と、間宮。

「マスター、テキーラお願い。」

私はマスターにテキーラを頼んだ。

「京香ちゃん、何で僕の好きなの知つてんの?」

と、間宮。

「偶々ですよ。」

なんて、本当は情報屋に聞いたんだけどね。

「お待ちどうさま。」

マスターがテキーラを置く。

「間宮さん、今は私のおじいです。沢山飲んで下さいね。」

「え、本当?悪いね。」

間宮は、そう言って、テキーラを飲み干す。

「はい、お次行きましょう。」

私は、間宮にテキーラを注ぐ。

間宮は再びテキーラを飲み干す。

私達はこれを一時間ほど繰り返した。

その結果、間宮は泥酔をしている。

これ以上酔うとまずいからなあ。

この辺でやめておこう。

私はマスターに金を払い、間宮を連れてBARを出る。

そして、次に向かつた先は、ラブホテル・スヴィートパラダイスだ。

私は間宮の名前を書き、チェックインをする。

「こちらがルームキーになります。」

ホテルマンは、私にルームキーを渡した。

受け取つたルームキーは、鍵だけで目立つものは何も付いていない。

「お客様のお部屋は205号室です。」

ホテルマンはそう言つて、会釈をした。

私は間宮を部屋へと連れて行く。

さて、先ずは部屋の間取りね。

私は、入り口を確認した。

扉は、下に5cm程の隙間があり、上にはピアノ線が一本通るくらいの隙間がある。

次に、入り口からの道のりだ。

ベッドに行くには、入り口を右に曲がり、壁づたいを直ぐに左へ行き、真っ直ぐ行けば辿り着く。

成る程。私は一人納得。

すると突然、間宮が私をベッドに押し倒して來た。

「京香ちゃん。僕の子を産んでくれ！」

間宮はそう言つて、私の服を脱がす。

私は何故か抵抗しなかつた。

こうなる事を望んでいたからだ。

それから暫くすると、私のアソコに間宮のアレが侵入していく。

間宮は、アソコから愛液を放出。

それは見なくても感覚だけで分かつた。

それが終わつたのは、夜が明けてからの事だつた。

私の体はかなり日照つている。

「京香ちゃん。先にお風呂入つて来なよ。」

と、間宮。

私は、

「篤さんから入つて。」

と、撰めた。

そうしなければいけなかつたからだ。

じやないと、計画が丸潰れになつてしまつのだ。

間宮は、

「じゃあ先に入るよ。」

と、言つてお風呂に入つていつた。

さて、準備するかな。

私は手袋をはめ、冷蔵庫を開けた。
中にはビール瓶がある。

これ、使えるな。

私は、鞄から青酸カリを出し、ビール瓶を開封し、中に入れて混ぜる。

これで殺害の準備は完了だ。

お次は、遺書だ。

これは本人に書かせるとしよう。

後は部屋の鍵だ。

密室にするのだから良く考えなくては。

私は、間宮が出てくる前に、鍵が部屋の扉の隙間を通るかを確認した。

鍵は、すんなり通つてくれた。

後は鍵を何処に置くかだ。

私は、間宮夫妻の事を思い出した。

間宮夫妻は、二人とも同じ指輪をしていた。

間宮 篤は、昨日来た時もしていた。

よし、これで行こう。

私は手袋を外し、間宮が出てくるのを待つた。

ガタン！

間宮が風呂から出でくる。

「篤さん。冷蔵庫にビール入つてるけど、お風呂上がりにどう?」

私は間宮にビールを獎める。

「そうか。

じゃあ飲もうかな。」

間宮は、服を着ると、冷蔵庫からビール瓶を出し、コップによそつて口に近付けた。

私はコップを取りあげて、

「飲むのはまだ」

と、言つた。

「どうして？」

間宮は聞く。

「貴方には遺書を書いて貰つからよ。」

「遺書？」

まさかお前…？」

「そ、貴方を殺します。

あ、怖がらなくて良いよ。」

そんな事を言つても恐らく無理だらう。

「お前、最初からこれが目的で近付いたのか…？」

「そうよ。」

「もしかして、一連の事件はお前が？」

「お察しの通りです。

私は証拠を残さない。

警察がいくら動いたつて私に辿り着く事は絶対に不可能。

今までの捜査で、私に近付けた事はある？」

「無い…。」

間宮はそう呟き、

「でも、あの方なら僕の死に疑問を抱いて…。」

と、付け足した。

「あの方つて、黒崎君の事かしら？」

「そうだ。」

「残念でした。彼には催眠術を掛けてあるわ。

つまり、私の言つなりよ。」

私はそう言いながら紙とペンを取り出した。

「くつ・・・。」

間宮は言葉につまる。

「これから私は指を鳴らして催眠術を掛けます。

催眠術に掛ると、自分の意思とは裏腹に、体が勝手に動き出します。

「

「や、やめろ。」

「却下です。奥さんに暴力を振った報いです。

貴方は暴行を加えた事を苦にして死ななければなりません。」

「ぼ、僕が妻に暴力？

そ、そんなの、何かの間違いだろ？」

間宮はとぼける。

「本当の事を言つて下さいね。」

パチン！

私は指をスナップさせ、間宮に催眠術をかける。

「貴方は、奥さんに暴力を振りましたか？」

間宮は素直に、

「振りました。」

と、答えた。

「どうなつてんの！？」

間宮は驚いた。

「催眠術を掛けたんですよ。」

「なあ頼む！」

殺すのだけはやめてくれ！

間宮は震えながら言つ。

「無理。依頼人の言つ事は絶対です。

「パチン！」

私は再び催眠術を掛け、

「遺書、書いて下さい。」

「

と、間宮に言つ。

「はい、仰せのままに。」

間宮はそう言つて、遺書をスラスラと書き出す。

『 8月10日木曜日

私は妻に暴力を振った上に不倫までしました。
もう、生きる資格なんてありません。

青酸カリを飲んで世を去ります。

間宮 篤』

遺書を書き終えた間宮は、テーブルのあるビールの入ったコップを取り、中身を飲み干す。

「くつ・・・。」

間宮は喉元を押さえて苦しみ始め、そのまま倒れて息を引き取つた。間宮の死を確認した私は手袋をはめ、間宮を仰向けに寝かせ、鞄からテグスを出し、それを入り口までの4倍の長さにする。

そして、半分に折り、Uの字になつてゐる方を、間宮のしてゐる指輪に固定し、自分の荷物と鍵を持つて入り口まで行き、扉を開き、テグスの両端を鍵に通し、両端を結び、扉の上からドアノブにひつ掛けで固定。

その後、鍵をドアの下に通し、ドアを完全に閉めて鍵を掛け、鍵を再びドアの下から中に入れ、ドアノブに掛けてあつた両端を解放し、そのままゆっくり後ろに引っ張る。

すると、鍵がテグスを伝つて被害者の手に自動的に移動。

それを感覚で確認した私は、テグスを軽く引っ張つて回収した。ふう、疲れた・・・。

私は、全てを終え、階段の方を向いた。

すると、一人の女性が私の事を腰を抜かしながら見つめていた。私は女性に近付き、

「今の見ちゃつた?」

と、聞いた。

もし見ちゃつたのなら、この女を口封じで殺さなければいけない。
それが殺し屋のルールである。

女は、

「だ、誰にも言いませんからー。」

と、震えながら言った。

どうやら見てしまった様だ。

「本当に、誰にも言わない？」

私が聞くと、女は震えながら首を縦に振った。
私は鞄から100万を出し、

「これ、あげるから黙つててね。」

と、金で買収し、

「誰かに言つたら殺すわよ。」

と、脅しを掛け、ホテルを後にした。

その後、今回の件はニュースになり、警察は自殺として処理した。
だが、一人だけこの件に疑問を抱いたのがいた。

高校生探偵の黒崎君だ。

ま、そんな事は私には関係の無いこと。
と言う訳で、今は事務所にいる。

「久住さん、ありがとうございます！」
と、依頼人の間宮婦人。

「これ、約束の報酬です！」

間宮婦人は500万の入った封筒を渡した。

私は受取り、

「殺しの依頼がある時はいつでも。
と、言った。

池田祭り

私は、久住 京香。19歳。
自分で言つのもなんだけど、私は久住 小春に似ていて可愛い、らしい。

因みに、警視庁の交通課に勤務している。
でも、本業は殺し屋。
つて、前も説明しなかつたつけ？
ま、良つか。

さて、今日の依頼人は・・・。
と思ったが、一人も来なかつた。
仕方ない、警視庁に出勤しよう。

私は事務所兼の自宅を出ると、車に乗つて警視庁へ向かつた。

「おはようございまーす。」

私は挨拶をする。

「京香ちゃんおはよう！」

メガネを掛けたオタクっぽい太つた男が挨拶を返す。

彼は、池田 一男。

池田は、私の事が好きらしいが、私は興味が無い。
特に、こんなデブ男は。

「池田さん・・・前にも言つたけど、名前で呼ばないで下さる？」

「何で。良いじゃん。」

む、ムカ付く！池田血祭り開催決定！

今夜決行！

後悔はない。

何故なら、元々私は池田には前からムカついていたからである。
それも、殺意が生まれる程だ。

「池田さん。」

私は池田を呼ぶ。

「何だい京香ちゃん。」

「今夜、私とデートしません?」

池田は、

「うん。する。」

と、喜びながら言ひ。

その時だった。

「久住さん。話があるんだけど。」

と、捜査一課の高木がやつて來た。

「話?」

「此処、じゃあれだから、屋上まで来て。」

私は高木と一緒に屋上へ行く。

「で、改めて聞くけど、話つて何ですか?」

私は高木に聞く。

「依頼。」

高木は答えた。

私は誰かに聞かれているんじゃないかなと思いながら、

「ま、待つて高木さん。

殺人の依頼は職場に持ち込まないでちょうどいい。分かつた?」

と、恐る恐る言った。

「「めん。

じゃあ、後で事務所行くよ。」

「うん。そうして。」

そう言って、私は交通課に戻り、

「「めん。私、早退する!」

と、同期の婦警に言い、自宅に戻った。

それから10分後。

ガチャ

事務所の扉が開き、高木が中に入ってきた。

「いらっしゃいませ。本日はどう言つたご用件でしょうか?」

「依頼。」

高木は答えた。

「依頼・・・では、改めてお名前と職業を。」

「高木 浩介。警視庁捜査一課に勤務します。」

「それで、依頼とはどう言つた事で?」

「池田を・・・交通課の池田を血祭りにして欲しい。」

「具体的にどんな血祭りですか?」

「『』の世からの抹殺。」

「動機は何ですか?」

「お金・・・。」

「金銭トラブルねえ。」

分かりました。承りますよ。

報酬は、300万でどうかしら?」

「さ、300万!?

ちょっと高いんじゃない?」

高木は驚いて言つ。

「自殺に見せかけた殺人で尚かつ密室の場合は500万。これでも安い方よ?」

「解ったよ。払うよ。」

と、高木はつまらなそうに言った。

と言ひ訳で、私は噴水公園の前で池田を待つてゐる。
すると、ノックタノックと、池田がゆっくり走ってきた。

「『』めん京香ちゃん。」

「池田さん、遅いです。」

京香あ、待ちくたびれたです。」

私は、わざと女の色氣を出した。

「『』めん『』めん。」

と、池田は謝る。

うし!」

こっちのペースに釣られてるな。

「京香あ、池田さんが行きたい所にい、連れてこきます。」

池田は目をハートにして、

「ホント！？」

と、言った。

だつて仕事だもん。
てか怪しめよ！？

なんて、オタクに怪しむと言つ概念なんて、端から無いけどね。

「僕、京香ちゃんとやりたいな。」

池田はニヤニヤしながら言った。

池田さん、いきなりそれですか？

まあ、どうせ殺すんだから良いけど・・・。

私は池田を車に乗せ、前回の墓場^{ラブ}ホテルに向かった。

「着きましたよ。」

私は池田に言つ。

池田は、車を降りると、館内に入つて行き、さつさとチェックインを済ませた。

池田の奴、これから殺されるつひのこ、おおほじやがだな。

「京香ちゃん早く。」

やれやれ。

私は、

「先に行つて待つて。」

と、池田に言つた。

「分かつた。205号室だから、早くしてね。」

池田はそう言って、先に部屋まで行つた。
馬鹿目。殺されるとも知らずに・・・。

それより、205つて・・・。

私は、

「カミソリ貰えますか？」

と、ホテルマンに頼んだ。
するとホテルマンは、

「京香が使うのか？」

と、言つた。

兄貴だつた……。

兄貴は、私より4つ年上である。
因みに、兄貴も殺し屋である。

「お、お兄ちゃん！…どうして此処に…？」
「それはこっちのセリフだ。」

と、兄貴。

なして答えへん！？

ま、良いか。

「お兄ちゃん、カミソリ。」

私は手のひらを兄貴に差し出す。
「ほらよ。

所で、さつきのメガネを掛けたテブはお前の彼氏か？

「違う。標的よ。」

「そうか。まあ、なんだ。派手にやらない方が良いぞ。お前はまだ
新米なんだからな。」

「私はもうプロです。」

「ほお。」

「え、それだけ？」

「ああ。」

ムカツク！依頼が来たら確実に殺してやる。

「じゃ、また後でね。」

私は兄貴に手を振り、エレベーターに乗つて一階に上がつた。
チン！

エレベーターが止まつて扉が開く。

「京香ちゃん、遅いよ。」

池田は、マジで泣きそうな声で言つた。
コイツ、マジでゾッコンー？

気持ち悪！

さつさと殺して帰る。

私は、池田と一緒に部屋へ入った。

間取りは、前回と一緒にだ。

「京香ちゃん、知ってる？」

と、池田。

「何ですかあ？」

「昨日ね、此処で人が殺されたらしいよ。」

池田は、唐突にそんな事を言った。

「名前は、間宮 篤つて言つたかな。

同じ署の捜査一課の人だよ。」

ふーん・・・え！？

それって、まずいじゃん！？

ひょっとしてあたし、証拠残しちゃつた？

それとも、100万くれてやつた糞婆が喋つたのか！？

ま、いざとなれば、高木さんのお父さんがいるし。

そんな事を考えてると、何時の間にかベッドの上で裸になっていた・

・いや、裸にされていた。

嫌だ・・・こんなデブとやるのだけは御免蒙りだ！
パチン！

私は指をスナップさせ、池田を催眠状態に陥れた。

その隙に私は、脱がされた服を着直した。

「池田さん。私の声が聞こえますね？」

催眠状態の池田は、

「はい。」

と、答える。

私は手袋をして、例のカミソリを取り出すと指紋を拭き取った。

「池田さん、カミソリを持つてお風呂場に行つて下さい。」

「はい。」

池田は、私からカミソリを受け取り、お風呂場へと向かつた。

「池田さん。全裸になつて、中に入つて下さい。」

池田は、私の言う通りに全裸になつて中にはいる。

「そうしましたら、お湯を溜め、カミソリで手首を切つて下さい。」

池田は、湯船に栓をすると、お湯を出し、カミソリで手首を切った。

「いひつ！」

池田は痛みによつて催眠が解ける。

「あれ？僕、こんな所で何やつてんの？」

池田は、自分が手に持つてゐるものと確認する。

「僕、何で自殺なんかしようつと？」

池田は咳く。

「貴方は自殺しなくてはならないのです。」

私は池田に言つた。

池田は驚いて振り向いた。

「な、何で僕が自殺を！？」

「自分の胸に手を当てて良く考えてみろよデブが！」

「デブだと？」

僕は、デブじゃないぞお！」

池田は怒り狂つて、手に持つてゐたカミソリで私の頬に傷を付けた。

ジワーッと、血が滲み出でてくる。

許さない・・・。

パチン！

私は再び指をスナップして池田を催眠状態に陥れる。

その間に私は、鞄の中にしまつてある果物ナイフを取りに行き、再びお風呂場へと戻つた。

「もう終わりよ、池田・・・。

お前を血祭りに上げてくれるわあ！」

私は果物ナイフで、池田の身体を滅多切りにした。

そして、池田の身体は血だらけになり、私は池田の返り血を浴びてしまつた。

血だらけの池田は、

「痛え！」

を連呼する。

「五月蠅い！」

私は怒鳴つて池田を黙らせる。

池田はびびりながら私の顔を見つめる。

私を見つめるその顔は、もの凄く憎たらしかった。

私は池田の顔面に、果物ナイフを思い切り突き刺した。

「うわー！」

と、池田が悲鳴をあげる。

ふと我に返ると、私はただ呆然とその場に立ち尽くしていた。全身を真っ赤に染めて。

ガタン！

扉が開き、数人の人達が入つてくる。

多分、張り込みをしている刑事だろう。

「久住 京香！

間宮 篤殺害容疑、並びに、池田 一男殺害の現行犯で逮捕する…ほらな。

「フフフ、何故に私が犯人だと？」

私は笑いながら問う。

「目撃証言だ。

昨日、此処で事件が起こつた時、殺人の一部始終を見ていた目撃者がいたんでな。

それで俺達は張つていたんだ！」

あの糞婆か。

やつぱり、口封じに殺しておけば良かつた・・・。

私は後悔していた。

「詳しい事は署に着いてからだ！」

刑事は、私に手錠を掛け、私を署まで連行した。

池田祭り（後書き）

殺し屋、掘まりました。

いえ、この殺し屋は掘まりません。

次回は逃げます。

警視庁崩壊寸前！？命がけの大脱走！

署に着くと、私は取調室に入れられた。

取調室では、二人の刑事が相手をするらしい。

怖い刑事役と、優しい刑事役とで役割分担がされている。

「うちの課の間宮 篤と、交通課の池田 一男を殺したのは君だね？」

？」

と、優しい刑事は言う。

だが、私は一切答えなかつた。

「聞こえなかつたかな？」

もう一度言うよ。

殺したのは、君だね？」

優しい刑事は、再び聞いたが、私は答えない。

答えるつもり等無い。

ダアン！

私が黙つていると、怖い刑事が机を蹴り飛ばし、

「お前が殺つたんだろ！」

正直に吐いちまえよ！」

と、言った。

でも、私は答えなかつた。

すると今度は、

「黙つてねえで何か言え！」

と、怖い刑事が言い、私の身体を蹴り飛ばした。

「刑事さん・・・女の子に乱暴ですか。訴えますよ？」

「訴えても構わんが、君は確実に負ける。」

と、優しい刑事。

「そんな事より、お腹空いたんだけど。」「ふざけるな！」

と、怖い刑事は言つて本気で私をぶん殴つた。

私はその場に倒れた。

「痛いじゃないですか・・・。」

「お前が言わないからだ！」

怖い刑事は私の腹を思い切り踏みつけた。

「くつ！」

怖い刑事は更に、

「言つまでやるぞ！」

と言つて、私の腹を再び踏みつけた。

私は痛みに耐えきれず、

「イヤーッ！」

と、甲高い悲鳴をあげてしまった。

許さない。

パチン！

私は指をスナップした。

すると、優しい刑事がふつと立ち上がり、「もう我慢出来ねえ！」

と言い、怖い刑事に暴行を加え始める。

そう、私は優しい刑事に催眠術を掛けたのだ。

「な、俺が何したってんだよ！？」

と、怖い刑事。

「可愛い女の子に乱暴した。それが許せない！」

「可愛かつたら犯人でも乱暴しちゃいけないってのか！？」

二人の刑事は、取調室で喧嘩を始めた。

私はその隙に取調室を出る。

しかし、次なる難関が待っていた。

取調室の様子を見ている刑事達だ。

「此處は通さんぞ。」

と、刑事が言い、全員で私の行く手を阻む。

「バトルロワイアル開始だ。」

パチン！

私は指をスナップする。

それと同時に、刑事達は一対一のタイムマンを始める。

その隙に、私はその場から立ち去る。

警視庁捜査一課。

取調室を離れ、最初に通る部屋だ。

幸い、他の刑事達はいなかつた。

ただ一人、いたのは高木だけだつた。

「久住さん・・・出られたんだ。他の皆は見逃してくれたの?」
と、高木。

私は首を横に振り、

「皆、喧嘩してるよ。

その隙に出て来ちゃつた。」

と、言つた。

「へえ。 そうなんだ。

あ、そうそう。

これ、約束の報酬。」

こ、こんな時に渡されても困るよ・・・。

私は嫌々と受け取り、鞄にしまつた。

「高木さん。 お願いがあるんだけど、良いかな?」

「良いよ。 僕も犯罪者だし。 犯罪者同士助け合おう。
で、お願ひって何?」

「逃亡・・・。 成田空港まで行くから乗せてつて。」

「久住さん、海外に逃亡するの?」

「だつて、それしか方法が。」

「だつたら、空港じゃなくて港だ。

それに、フェリーなら車が乗せられるからね。」

「あ、そつか。

つて、高木さんも来るの?」

「何言つてゐんだよ。 此処にいたらいづれ、僕も殺人教唆で捕まつ

ちやうよ。」

「分かった。一緒に行きましょ。」

「そうと決まれば、着替えだね。」

その格好じゃ、逃げられないからね。

ま、良いや。付いてきて。」

私は、高木に付いていく。

高木は、非常口の前に来た。

「此処から行けば見つかる心配も無い。」

そう言って、非常口を開ける高木。

私たちは、非常階段で下まで降りると、高木愛用の覆面パトカーに乗った。

「じゃ、先ずは事務所に行くよ。」

高木はそう言いつと、サイレンを屋根に設置して鳴らし、パトカーを走らせた。

パトカーは、走り出して数分で事務所に着いた。

「着替えたら、直ぐに戻ってきてね。」

と、高木。

私は覆面パトカーを降りると、ダッシュで事務所に入った。

そして、着替えてパトカーに戻る。

「高木さん、お金をおろしたいんで、コンビニに寄つて下さい。」

「あいよ！」

高木は、覆面パトカーをコンビニに向けて発進させた。

それから数分、パトカーはコンビニに到着。

だが、予想外の出来事が起つた。

コンビニの窓ガラスに、指名手配として私の写真が貼られていたのだ。

「しょうがない。お金は向こうへおろさう・・・。」

私はそう呟いた。

高木は、その気持ちを察して、パトカーを千葉の港に向けて走らせた。

警視庁崩壊寸前！？命がけの大脱走！（後書き）

命がけと言つほど命掛けでない気が・・・。

てか、催眠術も此処まで来ると、黒魔術ですね。

と言つ事は、オカルト小説の分類か。

食いしん坊殺し屋（前書き）

今回は殺しちゃせん。

食いしん坊殺し屋

「またたび！」

私は目が覚めると、いきなり叫んだ。

そこは、警視庁捜査一課の自分の机だった。

「京ちゃん、大丈夫？

うなされてたよ？」

と、髪の長い女性が言った。

彼女は同期の小島 小百合。

私は彼女に、

「大丈夫。怖い夢を見ただけ。」

と、言った。

「そう。なら良いけど。

で、どんな夢だったの？」

小百合は夢の内容を聞いた。

私は、夢の中の自分が殺し屋で、警察に終れて、海外に逃亡したと言つことを話した。

小百合はその話を聞いて、

「怖い。」

と、言った。

全くである。

でも、どこからが夢だったの？

と、疑問に思うのは何故だろうか？

それはそうと、今日は早番だから、帰るとしよう。

私は小百合に、

「またね。」

と言つて自宅に帰った。

・・・・・

私は自宅のベッドで横になっていた。

そう言つて、私は黒崎君に抱きついた。

だが、黒崎君は振り払つて突き飛ばした。

抱きつかれるのが嫌だつたらしい。

「あ、ごめん。痛かつた？」

と、心配する黒崎君。

「うん、痛かつた・・・。」

「『めん！本当に』『めん！』

黒崎君は土下座して謝る。

惨めだ。

「黒崎君、嘘だよ嘘。」

「騙したな？」

黒崎君は睨み付けて來た。

私は笑いながら言つた。

「だつて、黒崎君いじめると楽しいんだもん。」

と。

「殺すぞ？」

「素人には無理よ。」

「素人？」

やば！

「な、何でも無い！」

危ない危ない。

私が殺し屋だと事がバレたら何されるかたまつたもんじやない。

「それよりさ、何処に食べに行くの？」

「決めてない。

何食いたい？」

私は大好物の、

「寿司が食べたい。」

と、言つた。

「ショボ。

パーティーなんだから、もっと豪華な料理を・・・。」

「そうねえ・・・じゃあ、私がいつも行つてる豪華レストランはどう?」

「そ、それだけは却下だ!」

と、断る黒崎君。

「じゃあ何処なら良い訳!?」

私は膨れて言つた。

「カストなんかどう?」

黒崎君は言つた。

「カストねえ・・・。

良いわ、行きましょ。」

私達は、早速、カストに向かつた。

・・・・・

カストには大勢の客がいた。

「いらっしゃいませ。何名様でしようか?」

と、メガネを掛けたウェイトレスが聞く。

黒崎君が

「一名。」

と答えると、

「空いてる席へどうぞ。」

と、ウェイトレスが言つた。

案内してくれねえのかよ!?

私はウェイトレスを睨み付けた。

ウェイトレスは、

「お役に立てなくて申し訳ございません。」

と、私に謝る。

え・・・貴方は心が読める超能力者ですか?

ウェイトレスは微笑んだ後、

「人殺し。」

と、私の耳元で囁いた。

「ん。」

と、私は鼻を鳴らす。

この人、私が人殺しだって事知ってる・・・どうして?
何処かで見られた!?

まあ良いや、後で情報屋に調べて貰お。

私は携帯を取りだし、彼女の顔を盗撮して席に着いた。

「携帯見て。」

そう言って、黒崎君は、私から携帯を奪い取った。

「勝手に触らないで!」

私はテーブル越しに携帯へ手を伸ばす。

だが、黒崎君がひょいと避け、私は顔面をテーブルに打ち付けた。

その間に、黒崎君は勝手にいじり、中を覗いていた。

私は顔を上げ、

「プライバシーの侵害よ!」

と、携帯を奪い取る。

「ちえつ。」

黒崎君は舌打ちをし、つまらなさそつてメニューを開いた。

「これにしよ。」

と、黒崎君は独り言を囁く。

おっと、私も決めなくては。

私はメニューを開いた。

メニューには色んなのが写真付きで載っていた。

お、鮪の山かけ丼があるでは無いか。

私は店員を呼んだ。

来たのは、ウエイターだった。

「(注文はお決まりでしょうか?)

と、ウエイター。

私たちは同時に、

「鮪の山かけ丼をお願いします!」

と、答えた。

「かじこ畏まりました。」

と言い、ウェイターは調理場に入つて行つた。

数分後、先ほどのメガネを掛けたウェイトレスがご注文の品を持ってきた。

ウェイトレスは、箸、お手ふき、水、ご注文の品の四つを置くと、その場を去つて行つた。

「あれ、一人分しか来てないよ？」

「後から持つて来るだろ？」

久住、先に食べろよ。」

「良いよ、黒崎君が先に食べなよ。」

私はにつこつと微笑んで言つ。

「そう。じゃあ遠慮無く。」

と、黒崎君は食べ始めた。

その後直ぐ、私の分が運ばれてきた。

私は箸を取り、

「いつただつきま～す！」

と、それを箸で口の中に流し込み、嚥んで飲み込む。

5秒後、食器は空になつた。

「いひそひそひまでした。」

と、私は言つ。

それを見て、硬直する黒崎君。

私は目の前で、

「おーい。」

と手を振るが、反応は無かつた。

仕方がない。

黒崎君には悪いけど私が貰おう。

私は黒崎君の分を食べ干した。

その後、お勘定を済ませ、黒崎君を負ぶつて帰路に着いた。

全く、だらしないんだから・・・。

それにしても、あのメガネの娘は一体？

アイドルの殺害

「久住に頼みがある！」

突然、黒崎君が私に言った。

私は返事をし、頼みとやらを聞いてみる事にした。

その頼みとは、

「刑事やめてアイドルの木之本 アスカとして芸能界に入ってくれ！」

と言ひ事だつた。

私は言つた。

「何で私が！？」

と。

「こ」の間の事件、覚えてるだろ？」

「こ」の間の事件？」

「木之本 アスカが自殺した件だよ！」

自殺の件・・・。

そう、あれは一日前の事だつた。

私の下に一通の手紙が届いた。

私はポストを開け、手紙を手に取つた。

あら、和茂からだわ。

何だらう？

私は手紙を開けて読んだ。

内容は、

『久住さん、お願ひがあります。

今、芸能界で人気ナンバーワンのアイドル、木之本
して下さい。

宮本 和茂。』

と言ひ事だつた。

殺しの依頼か・・・。

私はその場で、和茂に電話を掛けた。

『はい、富本・・・・。』

「もしもし、久住だけど。」

『あ、久住さん。

手紙、読んでくれた?』

「うん、読んだよ。

それで、どうやってやれば良いの?』

『自殺に見せかけて欲しい。

本当は俺が殺しても良いんだけど、立場と言つのがあるからさ。
そう言えば、和茂って^{ターゲット}標的のマネージャーやってる言つてたな。

それのせいいか?

まあ良いや。

あまり深入りするとキリがないから。

私は、

「報酬は、1・000万でどうかしら?」

と、答えた。

『了解。後で振り込んでおくよ。』

「あら、自棄に素直じゃない?」

いつもなら高いつて文句言う癖に・・・。

『色々とあって大金持ちになつたのさ。』

「あ、そう・・・。

所で、動機は?』

『聞いてくれるの?』

実はね、木之本の糞婆の態度が・・・・・。

ボガツ!

だーれが糞婆よー?』の糞ジジイが!』
うわっ!

何か怒られてるよ。

『と、兎に角そう言つ訳だからよろし・・・・・。

ボグツ!

ちょっと誰に電話してるのよ！？

ブツツ、ツー、ツー、ツー…………。

あら、切れちゃいましたね。

ま、良いや。

私は、携帯をしまい、情報屋の下へ向かつた。

「情報屋、アイドルの木之本 アスカについて詳しく調べてくれ。と、私は情報屋に頼んだ。

「木之本 アスカの何について調べて欲しいんだい？」

と、情報屋。

「そうね・・・彼女の性格と生活面でも調べて貰おうかしら？」

「性格は・・・猫かぶり、臆病、血が苦手。

生活面では・・・良く解らんが、一人暮らしをしてるそうだ。」「情報屋が知っているのは以上だった。

これだけ情報がありや何とかなるよ。

私は一旦家に戻り、あるものを用意し、彼女の自宅へ行った。だが、鍵が掛かっており、中には入れなかつた。

致し方ない。

私はポケットから針金を出し、

「ちょちょいのちょい。」

と、鍵を開けて中に入り、鍵を掛ける。

「案外簡単に入れたわね。」

と、独り言を言う。

さて、先ずは間取りからだ。

玄関から廊下を真っ直ぐ行くとリビングに出るのね。

その先は何もない。

狭い家なのね。

そう言えば、廊下に二つか三つ部屋があつたな。
見ておくか・・・。

私は廊下まで戻り、部屋を確認する。
成る程、リビング側の扉を開けるとトイレになつてゐるのか。

お次は真ん中の部屋ね。

私は真ん中の扉を開けた。

すると、部屋の中に一人の少女がいた。

「誰！？」

と、叫ぶ少女。

多分、このチビ女がアイドルの木之本 アスカだらう・・・。

それにしても、私に良く似てるわ。

と言つより、私自信がそこにいるかの様だよ。

「あ、あんた誰よ？」

警察呼ぶわよ！？

少女は携帯を取りだした。

「お、落ちついて！」

私、別に怪しい者じやないから！

「怪しいわよ！」

勝手に人の家に入つて来て！」

少女はそう言いながら、110番通報をした。

このままではまずい！

そう思つた私は、咄嗟に少女の腹を思い切り殴り、その場で気絶させた。

「悪く思わないでね。」

私はそう言つと、少女の携帯を取り、

「すいません、間違えました。」

と、言つて電話を切つた。

私は鞄からロープを取り出すと、革の手袋をはめ、気絶中の少女を傍そばにあつた椅子に座らせ、全身をロープで縛つて拘束した。

「う・・・うん・・・。」

少女が目を覚ます。

「！？」

少女は驚いた。

自分が今置かれている状況に。

「何よこれ！？」

「こんな事して、どうするつもり！？」

と、少女は怒鳴る。

私は鞄からもう一本ロープを取りだし、天井にぶら下げ、輪を作った。

「ま、まさか！？」

と少女。

「あら、良く解つてるじゃない。

そうよ、貴方はこれから私に殺されるの。」

私はそう言つて、三本目のロープを取りだし、それを少女の首に掛ける。

「嫌！やめて！」

少女はもがこうとしたが、身体を拘束されている為に動けなかつた。

「こ、こんな事して許されるとつ！？」

少女は何かを言いかけたが、一瞬だけ私がロープをきつへしめた。

「私語禁止！

貴方、今の状況が解つてるの？

私が聞くと、少女は首を縦に振つた。

「なら良いわ。

所で、君はこれから旅に出るのだけれど、何か言い残した事無い？

「何が目的で私を殺すの！？」

「和茂に頼まれたからよ。」

「和茂って誰？」

「貴方のマネージャーの畠本 和茂よ。」

「お姉ちゃん、私とアスカお姉ちゃんの事、間違えてるでしょ？」

え？

それってどういう事？

私、てっきりこの娘が標的だと・・・。

その時、私とそっくりで同じくらいの背丈の女の子が入ってきた。

「由香！？」

その娘は驚いた。

「あんた、私の妹に何してんのよ！？」

女の子は怒り、私に近付いて来る。

「動かないで！」

この娘がどうなつても良いのかしら？』

私は女の子を脅す。

「貴方が木之本 アスカさんね？」

私は女の子に聞く。

女の子は、

「そ、そうだけど？」

と、答える。

私は持っていたロープを思い切り引っ張った。ゴリッ！

少女の首の骨が折れる。

少女はぐつたりし、動かなくなつた。

「あ、あんた・・・妹に何したのよ！？」

女の子は聞く。

私はそんな彼女に、

「な、何したのって、私は何もしていないわよ。

貴方がこの娘を殺したのよ。」

と、私以外には理解出来ない事を言い、彼女に近付く。彼女は後ずさりをしながら、

「な、何よ・・・」

と、呟く。

「どうして逃げるの？」

私は彼女に聞く。

彼女は、

「こ、逃げてるんじゃないわ！」

と言つて、私にボディーブロー（ボクシングで腹をパンチする事）をした。

「ぐつ！」

私はお腹を押された。

仕方がない・・・アレでケリを付けよう。

私は指をスナップさせ、彼女に催眠術を掛けた。

「指なんか鳴らして、何がしたいのかしら？」

彼女は聞いた。

「自殺して貰うのよ。

さあ、紙渡すから遺書書いて。」

私はそう言つて、鞄から紙と鉛筆を出し、彼女に渡した。

彼女はそれを受け取つた。

「な、何！？」

何で勝手に身体動くの！？」

彼女は自分の行つた行動に驚いて戸惑つていた。

「催眠術を掛けたのよ。

さあ、『私は妹が憎いと言つ理由で妹を殺してしまいました。死んでわびます。』って書いて。」

私は彼女に命令をした。

彼女は、すらすらと遺書を書いて行く。

「わ、私じゃない！身体が勝手に動くのよ！」

そう言いつつ、遺書を書き終えた。

私は遺体を解放し、椅子からどかした。

女の子は、椅子に乗つかると、首に輪を掛けた。

「し、死にたくない！死にたくない！」

彼女はそう言いつつ、椅子を蹴り飛ばして首を吊つた。

私は遺体を拘束していたロープを急いで回収してその場を去つた。

後日、二人の遺体が発見され、現場に残されていた状況から、警察は妹を殺した後、怖くなつて後追い自殺をしたと言う事で片づけた。幸い、この事はニュースにはならなかつた。

私が遺書の最後に、

『ニュースにはしないで下さい。』

と、付け足したおかげで・・・。
と言ひ訳で、二日が経った今、黒崎君に代わりを務めろと頼まれた
と言ひ訳である。

勿論、私はその頼みを断固拒否した。

「そこを何とかしてくれよー」

と、頼み込む黒崎君。

「あー！？」

もうこんな時間！

私、仕事あるから！」

と、私は適当にあしらつて血圧を出た。

アイドルの殺害（後書き）

皆さとお気付かでしようか？

この小説には「組織」のキャラが出ています。

まあ、それだけなんですけどね・・・。

今後は、「組織」と関わらせて行きたいと思います。

違反者

(くづくづく。)

あれがお前をはめるものだと知らずに。)

一人の男が、京香の姿を見つめながら、心中で呟いた。
宮本 和茂 それが男の名前だ。

情報屋の家

「殺し屋。」

情報屋が京香を呼んだ。

「何かしら?」

と、返事をする京香。

すると情報屋、

「此處に一本のテープがある。見てみる。」
と、ビデオテープをビデオデッキに差し込み、再生ボタンを押した。
すると画面に、映像が写し出される。

「これって、和茂の部屋じゃないつ?

貴方、何時の間にこんなのか?」

「黙つて見てろ。」

「ふつ、これで久住も終りだな。」

画面に写った和茂は、そう言った。

そして、彼の手には、数枚の写真が握られている。
その写真には、京香の人殺しの姿が写っている。
どうするつもりなのか?

「これをあいつに見せて揺すれば。
と、ニヤ付く和茂。

「これは偶然、俺の所に送られて来た物だ。」

そう言つたのは、情報屋だ。

「情報屋、これは確かな物なの？」

「今、冴京谷が調べている。」

そう言つと、情報屋の携帯が鳴る。冴京谷からだ。
情報屋は通話を押すと、

「冴京谷か。

何か掴めたか？」

と、電話の相手に聞いた。

「・・・そうか。

解つた、伝える。「

そう残し、電話を切る情報屋。

「何か掴めたの？」

「ああ。

宮本の奴、お前をゆすって、金を貰い、警察に垂れ込む気だ。

「違反者・・・殺さなくては。」

と、ニヤ付く京香。

「じゃ、私は帰るわね。」

そう言つて、京香は情報屋の家を出て行つた。

直後、

「大丈夫かな、あいつ・・・。」

と、情報屋は呟いた。

自宅に着いた京香は、人一人入れるくらいの金庫から、PSG1（
狙撃銃）を取り出した。

「よし！』

と、氣を引き締めた京香は、颯爽と家を出て行つた。

事件現場

宮本はそこにいた。

京香はそんな彼に、

「こんな所で何やつてるのかしら？」

「さ、君こそ何やつてるんだい？」

宮本は吃驚した様子で言った。

「貴方が知る事じゃなくてよ？」

京香はそう言つて、宮本を睨み付ける。

何だ？ 宮本はそんな顔をした。

「京香、貴方にお願いがあるんだけど、聞いてくれるかな？」

「お願い？」

言つてみなよ。」

「じゃあ言つけど、私に殺されてくれない？」

はあ？ 宮本はそんな顔をして、

「どう言つ意味？」

と、問つ。

京香はその問いに、

「真犯人として死ね そつ言つてるのよ。」

「何で俺が？」

「殺人依頼第3ヶ条 殺し屋を警察に突き出さない。もし、破つ

た場合、又はそれに近い行為をした場合は、抹殺をする。

それが殺し屋に依頼する時の最低条件よ。」

「なつ、何を言つてるんだい？」

僕が君を陥れるなんて事、する訳無いだろ。」

「じゃあ、これは何かしら？」

そう言つて、ビデオの一部を写真にした物を取り出し、宮本に見せる。

「あつ、いやつ、それはっ？」

「問答無用！」

そつ言つて、宮本に催眠術を掛ける京香。

宮本は催眠状態になると、京香の操り人形の様になる。

「さて、和茂にはこれから、あるものを書いて貰います。」

そう言つて、日記帳を取り出す京香。

京香はそれを、富本に渡すと、

『木之本を殺したのは俺だ。』

そう書かせた。

書き終えた富本は、日記帳を京香に返した。

また、返す際に、気付かない様、京香の名前を残した。

こいつ、催眠には掛かっていないみたいだ・・・。

「これから貴方には、日記帳に残した通り、テレビ局の屋上に行つて貰います。

そこまでは、一人で行って下さい。」

その言葉に応えて、富本はテレビ局の屋上に行く。

(さて、後はこれを・・・。)

心中でそう呟くと、京香は乗つて来た車に乗り込み、現場を離れた。

ビルの屋上

このビルは、東京タワーの約一分の一の高さで、テレビ局より高い。テレビ局からは、少し離れており、狙撃するには持つてこいの場所である。

京香はこのビルの屋上で、PSG-1の調整をしていた。

調整が終ると、PSG-1を覗き、テレビ局の屋上に照準を合わせる京香。

すると丁度、富本の姿が入り込んだ。

そしてもう一人、黒崎 薫の姿もある。

(来た来た。)

心中でそう呟き、京香はニヤリと笑つた。

成る程、これでピースが揃つたらしい。

パン！

京香は P S G 1 の引金を引いた。

弾は富本に向けて真っ直ぐ飛んで行き、富本の頭を貫通した。

富本はその場に倒れ、息を引き取つた。即死だ。

京香は、狙撃が成功すると、直ぐにその場を去つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196a/>

殺し屋本舗 久住 京香

2010年10月11日02時43分発行